

令和4年度全国学力・学習状況調査における

北九州市立 大里柳 小学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和4年4月19日(火)に、6年生を対象として、「教科(国語、算数、理科)に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思います。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査内容

- (1) 教科に関する調査(国語、算数、理科)

教科に関する調査(国語、算数、理科)

- ①身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
- ②知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関わる内容

※調査では、上記①と②を一体的に問うこととする。

- (2) 児童質問紙調査

児童質問紙調査

○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

3. 教科に関する調査結果の概要

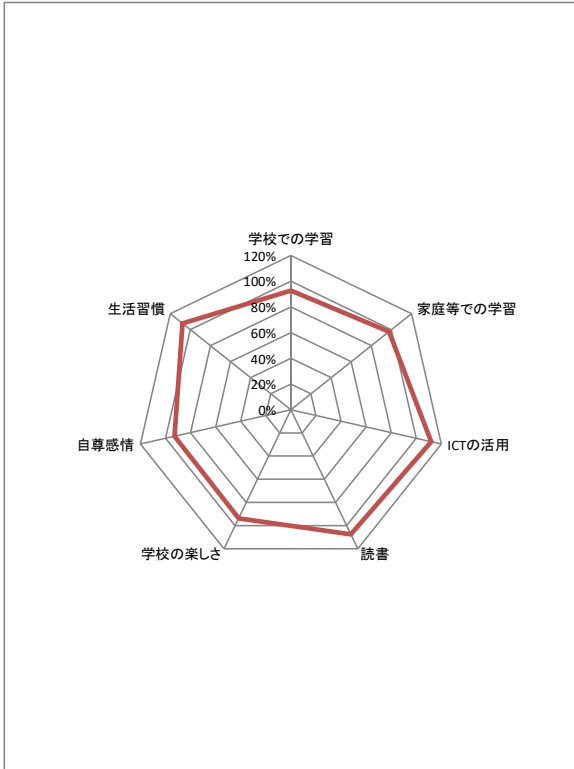
(1) 全国・本市の学力調査(国語、算数、理科)の結果

本年度の結果	国語		算数		理科	
	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率	平均正答数	平均正答率
本市	8.9	64	9.8	61	10.4	61
全国	9.2	66	10.1	63	10.8	63

(2) 本校の学力調査結果の分析

国語	全体的な傾向や特徴など	<ul style="list-style-type: none"> ○ 全ての内容・観点・問題形式で全国平均正答率を上回っている。 ○ 無解答率は、全国の無解答率が低い項目については高く、全国の無解答率が高い項目については低い傾向がある。 	全国平均正答率との比較 上回っている
	よくできた問題	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「話すこと・聞くこと」の領域では、互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い、自分の考えをまとめる問題の平均正答率が高かった。 ○ 「書くこと」の領域では、学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことの問題の平均正答率が高かった。 ○ 「読むこと」の領域では、登場人物の相互関係について、描写をもとに捉える問題の平均正答率が高かった。 	
	努力が必要な問題	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「読むこと」の領域では、人物像や物語の全体像を具体的に想像する問題の無回答率が全国と比べ高かった。 	
算数	全体的な傾向や特徴など	<ul style="list-style-type: none"> ○ 全体的に全国平均正答率を上回っている。「数と計算」、「変化と関係」「データの活用」の領域は、全国平均正答率を上回っている。 ○ 「図形」の領域は全国平均正答率をやや下回っている。 ○ 無解答率は、全体的に全国の無解答率と比べ高いことが課題である。最後まであきらめず問題に取り組むように声掛けが必要である。 	全国平均正答率との比較 上回っている
	よくできた問題	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「数と計算」領域では、かけ算の答えが一定の数より必ず大きくなることを示された場面において、目的に合った数の処理の仕方を考察する問題の平均正答率が高かった。 ○ 「変化と関係」領域では、伴って変わる二つの数量が比例の関係にあることを用いて、未知の数量の求め方と答えを記述する問題の平均正答率が高かった。 ○ 「データの活用」領域では、分類整理されたデータを基に、目的に応じてデータの特徴を捉え、考察する問題の平均正答率が高かった。 	
	努力が必要な問題	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「図形」領域では、図形を構成する要素に着目して、長方形や平行四辺形の意味や性質、構成の仕方について考える問題の平均正答率が低かった。 	
理科	全体的な傾向や特徴など	<ul style="list-style-type: none"> ○ 全ての内容・観点・問題形式で全国平均正答率を上回っている。 ○ 無解答率は、全体的に全国の無解答率と比べ高いことが課題である。最後まであきらめず問題に取り組むように声掛けが必要である。 	全国平均正答率との比較 上回っている
	よくできた問題	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「粒子を柱とする」領域では、自分で発想した予想と、実験の結果を基に、問題に対するまとめを検討して、改善し、自分の考えをまとめる問題の平均正答率が高かった。 ○ 「生命を柱とする」領域では、観察などで得た結果を、他者の気付きの視点で分析して、解釈し、自分の考えをまとめる問題の平均正答率が高かった。 ○ 「地球を柱とする」領域では、観察などで得た結果、結果からいえることの視点で分析して、解釈し、自分の考えをまとめる問題の平均正答率が高かった。 	
	努力が必要な問題	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「エネルギーを柱とする」領域では、実験で得た結果を、問題の視点で分析して、解釈し、自分の考えをまとめる問題の平均正答率が低かった。 	

4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要



質問紙調査の結果分析

○ 「学校での学習」について、全国平均をやや下回っている。「授業で学んだことを活かし自分の考えをまとめる活動」や「自分で課題を立てて情報を集め、整理して、調べたことを発表すること」については、全国平均を上回っている。

しかしながら、話し合い活動において「自分の考えを深めたり広げたりすること」や「学習した内容について分かった点やよく分からなかった点を見直して、次の学習に繋げること」に課題をもっている児童が全国と比べ多い傾向にある。自分の考えを表現する力を伸ばすために「自分の考えを整理する時間の確保」と「書く活動」(ノート指導、学習感想)「話し合い活動」を重視する必要がある。また、「分かる・分からない」の自分の理解状況を把握させ、教師が細かくチェックを行って児童一人一人の課題やつまずき改善に役立てる「形成的評価」を行う必要がある。

○ 「家庭学習」において、家で計画を立てて勉強することや学校が休みの日の勉強については全国平均を上回っている。

しかしながら普段(月～金)において1時間以上勉強する児童は、全国平均を下回っており、家庭学習の充実を図る必要がある。

○ 「ICTの活用」や「読書」について、全国平均を上回っている。

○ 「学校の楽しさ」や「自尊感情」について、全国平均をやや下回っている。子どもが学校が楽しみとなるよう、新しい学校生活様式の中でもできる集会などの活動時間確保をしたり、学級内での児童一人一人の居場所づくりを行い、「あなたがいないければ困る」という自己有用感を高める取組を行うようにする必要がある。

○ 生活習慣では、朝食を毎日食べている割合と毎日同じ時刻に寝ている割合とスマートホンの活用が1時間未満の割合について、全国平均を上回っている。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科に関する取組

全職員で「スクールプラン」「主題研修」の本校での取組内容について共通認識をし、「学習規律(大里柳小スタンダード)」「書く活動(ノート指導)・ふりかえり」「タブレット端末の効果的な活用」「補充学習(やなぎタイム)」「話し合い活動」の重点化を図る。

〈継続して行う具体的取組〉

※ 「主題研修」の補充学習の研究体制として、やなぎタイム研究部①形成的評価を中心とした国語部・算数部②話し合い活動部を置き、全教職員で研究し、よりよい実践を構築していく。

○ 補充学習である週5回(月・火・水・木・金)の朝タイムの時間を使ったやなぎタイムでは、月・水曜日は「国語科」、火・木曜日は「算数科」で適時タブレットの「ドリルアプリ」を活用し、形成的評価を伴う国語科、算数科の基礎力の向上と、児童の学ぼうとする意欲を向上させ、主体的に学習に取り組む態度を育成する。金曜日は、「話し合い活動」で適時タブレットの「スカイメニュー」を活用し、自分の考えをグループやクラス全体に伝える活動(話し合い活動)を確立し、自ら考え伝える力を育成する。

○ 朝タイムの「話し合い活動」については、各教科等の話し合い活動の礎となるようにする。全職員で、一単位時間の授業の中で、必ず「話し合う活動」を取り入れることを全教科で取り組む。その際、やなぎタイムの話し合い活動を生かして行う。

○ 全職員で、ノート指導において「めあて・まとめ・自分の考えのあるノートづくり」を行う。さらに、思考の足跡が読み取れるノートづくりを指導し、自分の考えを基に自分の考えを他の人に説明できるようにする。

○ 考えの広がりや深まりを意識化できるように、発表や振り返りの仕方を工夫する。(○○さんの考えを参考にして・○○さんの考えを取り入れて)

〈国語科の具体的取組〉

○ 導入時に何のために何について活動を行うのか明確にする。

○ 目次や牽引、見出しに着目して読んだり、キーワードを見つけながら読んだり、図表と結びつけて話したりさせる。

○ 自分の考えを整理する時間(一人活動・振り返り)をとる。

○ 多様な書く活動(自分の考えを何字以内に書かせたり、筆者の考えを基に記述させたり、複数の条件を基に記述させたり)を考える。

〈算数科の具体的取組〉

○ 図形を構成する要素に着目して、長方形や平行四辺形の意味や性質、構成の仕方について考えさせる。

○ 「書く」活動の充実を行う。自分の考えがあるノート指導を行ったり、テープ図や数直線をノートに書かせて問題を解かせたり、複数の情報から分かることを書いて話し合わせたりさせる。

○ グラフの特徴を複数の観点で捉えて情報を読み取るようにさせる。

○ 複数の情報を関連づけて論理的に考察するようにさせる。

〈理科での具体的取組〉

○ 単元や題材の内容によって、自分自身で実験内容を考えさせ、実験で得た結果を、問題の視点で分析して、解釈し、自分の考えをまとめていく学習展開を行うようにする。

○ 実験した後に、自分の実験結果と照らし合わせながら、短時間の動画を見て確認し、自分の考えを深めさせる。

② 家庭生活習慣等に関する取組

全職員で「スクールプラン」の本校での取組内容について共通認識をし、「家庭学習」の重点化を図る。

〈継続して行う具体的取組〉

- 「家庭学習の手引き」を基に、低学年30分程度、中学年45分程度、高学年60分程度の家庭学習について、実践化が図られるように働きかける。
- 「家庭学習の手引き」を基に、主体的に複数教科の自主学習に取り組み、家庭学習の素地を作るために学期に1回、1週間の家庭学習ウィークを行い、「自ら考え、やりぬく子ども」を育てる。家庭学習では、学校から出る宿題と復習や予習のほか、課題を自分で見つけて行う自主学習を合わせ、補充学習を行う。
- 家庭学習の手引きを全家庭に配布し、家庭と連携した取組を推進し、家庭学習の習慣化を図る。全職員で、年間通した「家庭学習頑張りカード」を基に計画的に家庭学習に取り組むように指導する。

〈自尊感情を高める具体的取組〉

○ 児童が活躍できる場面の実現

- ・ 児童会を中心に「あいさつ運動」に取り組む。
 - ・ 代表委員会での取組「やなぎ小をあったかことばでいっぱいこしよう」で「やさしさ・かしこさ・たくましさ」について各学級の学活や帰りの会で 互いを認め合い、褒め合う取り組みを継続していく。
 - ・ 学級では、児童が成就感・達成感を味わうことができるように役割を与え、児童への肯定的な言葉がけを行う。発表のときや振り返りのときに友達の考えを取り入れたり、ヒントにしたりしたことを伝えることで互いに自己有用感を高める。
 - ・ 縦割りグループを軸とした異年齢集団での活動を通して、思いやりの心や自尊感情・自己有用感を高める特別活動の充実を図る。
 - ・ 「対人スキルアップ」に短時間で取り組み、児童のコミュニケーション能力を高める。
 - ・ 「北九州子どもつながりプログラム」を計画的に実施し、児童同士の人間関係を深める。また、学級や学校への所属感を高め、有用感をもたせるために、低学年では、当番活動、中学年では当番活動と係活動、高学年では委員会活動を充実させる。
- 状況や背景に気を配った、きめ細やかな対応
- ・ 学期に1回の「いじめアンケート」を実施し、全児童に面談をすることにより、早期発見に努めるとともに誰もが相談しやすい体制の整備を行う。
 - ・ 児童に寄り添い、個別の教育相談や電話対応、家庭訪問を行う。